

## 高度経済成長期における「知性」の変容：庄司薫 『赤頭巾ちゃん気をつけて』論

石川，巧  
立教大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/8505>

---

出版情報：九大日文．8，pp.30-59，2006-10-01．九州大学日本語学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：  
権利関係：



# 高度経済成長期における

## 「知性」の変容

——庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』論——

SHINKAWA  
石川 巧

はじめに

昭和二十五年六月に勃発した朝鮮戦争の特需によつて経済復興のきっかけをつかんだ日本は、昭和三十年代に入つて、農業・林業・漁業などの第一次産業から製造業を中心とした第二次産業および小売・金融・運輸・通信などの第三次産業へと産業構造を転換し、昭和四十八年のオイルショックに至るまで二十年近くにわたつて年平均十%前後の経済成長を遂げた。この高度成長を支える原動力になつたのは、様々な領域における技術革新とそれともなう設備投資および工業製品を中心とした輸入の拡大である。鉄鋼、石油化学、機械、電気などの領域に大規模な労働需要が生まれたことによつて、人々のあいだに消費革命（耐久消費財への旺盛な需要の喚起）が起り、大量生産／大量消費時代が到来するのである。また、昭和三十九年の東京オリ

ピック前後には、道路、港湾、鉄道といった交通網の整備、工業用地の開発、住宅建設などの公共投資が積極的になされ、国民一体となつた景気拡大路線がとられていく。高度成長の陰には、地方の過疎化、第一次産業の衰退、公害、環境破壊など、困難な問題も数多く起こつていたが、人々は、そうした負の遺産から目を背けるように消費生活を愉しみ、時代が疾走していく心地よさに身を委ねた。

だが、こうした生産／消費の景気拡大が恒常的に続くはずはない。政府は、豊かな社会づくりのために国民ひとりひとりの人的能力を向上させ、新しい活力をうみだすことでより長期的な繁栄をめざそうとした。昭和三十五年十二月に池田勇人内閣が決定した「所得倍增計画」において、産業・経済の拡大とともに社会資本の充実や科学技術の振興などが目標としてかかげられ、教育の価値や重要性を見直す動きが活発になつたこと、あるいは、昭和四十年一月の中央教育審議会特別委員会が作成した草案に書き込まれ、その後の教育政策に大きな影響を与えた「期待される人間像」という言葉が示すように、この時代には、来るべき大衆社会を見据えた国家主導の人材育成システムが着々と構築されているのである。

また、ひとたび物質的な豊かさを手に入れ、その豊かさを自分の子どもたちにも継承させたいと願う人々の多くは、そうし

た国家からの期待に進んで応じ、子どもにより高い学歴を身につけさせること、よりよい大学に合格させることをめざすようになる。かつて、近代化への道のりを歩みはじめた頃の日本は、封建的な身分制度を廃止するかわりに、個々人の能力に応じてより高い教育を受けることのできる立身出世主義を導入し、成功の可能性を平等にふりわけつつ、同時に、学歴に基づくピラミッド的な階層を強固にする戦略によって安定した社会秩序をつくりあげたが、高度経済成長期においては、そうしたエリート主義が廃れ、むしろ、親から子への文化資本の委譲という側面が前景化してくる。大学は、旧い世代が獲得した文化資本を次の世代に受け渡すための担保としての性格を強めると同時に、高度化していく社会に対応できるような穏健で良識に富んだ人材を量産する機関として期待されるようになる。昭和三十八年に十二・一％だった大学進学率が、昭和四十五年には二十三・六％に、昭和五十年には三十七・八％に跳ねあがっていく事実からも明らかのように、大学はこの時期、急速に大衆化していく。

竹内洋は『日本の近代12』学歴貴族の栄光と挫折』（平成11年4月・中央公論社）のなかでこの問題にふれ、大学卒業者がそれまでのホワイトカラーからグレーカラー化し、サラリーマンにおける学歴別労働市場が崩れはじめたことよって、特に、

難関といわれる大学をめざす受験生たちが抱く「キャンパスの教養知識人の物語」と、彼らを待ち受けている「実人生の大衆的サラリーマン物語」のあいだに大きな隔たりがうまれたと指摘している。また、『20世紀の日本11 知識人——大正・昭和 精神史断章』（平成8年8月・読売新聞社）を書いた坂本多加雄は、当時、全国で起こりつつあった大学紛争の要因のひとつに「大学の大衆化」を挙げ、「大学が体現するアカデミズムの世界が、人生や社会をめぐる諸々の事象についてのしかるべき理想やあり方を指し示すような役割を世間一般から期待されなくなつた」ことに対する憤懣が大学内に蓄積されていく状況を検証している。社会的権威を失った大学のなかで、「思想」よりも「知識」「情報」を、「知識人」であることよりも「専門家」であることを求められるようになり、次第に閉塞感をつのらせていた学生たちの抑圧されたエネルギーが、大学紛争に捌け口を求めていったというわけである。安保闘争と連動したデモ活動、大学の民主化や学生の自治をめぐる当局との対立、バリケード封鎖、内ゲバ、暴力革命闘争など、その現象は様々だが、もしそこに何らかの因果関係を認めるとすれば、この時代における大学紛争は、まさに、学生自らが大衆としての自画像を描き、自身の手で「キャンパスの教養知識人の物語」を終焉させる行為だったということになる。

この時代の学生たちに絶大な人気を誇っていた高橋和巳は、『悲の器』（昭和37年11月・河出書房新社）のなかで、「最高学府」の教授として学界に君臨していた主人公がスキャンダルによって大学を追われる場面を描き、最終講義に臨んだ老教授に、「諸君はエリートである。世に言う秀才根性や特権意識とは無関係に、なお諸君はエリートであると私は言う。この組織万能、派閥万能の時代に、なお所属する集団の勢力や利害を離れて、個人の責任において法を反省し、世界を鳥瞰できる唯一の階層として諸君をエリートであるとわたしは規定する。その立場の浮動性、不安定性にもかかわらず、それゆえにこそ、インテリゲンチヤには巨大な任務が課せられている。諸君が理性でなく、諸君が統一者でなく、諸君が鳥瞰者でなければ、正義を利害追求の装飾と化してしまつたこの世界の、だれが統合者でありうるか。真の批判、真の自由をだれがこの世界にもたらしうるか」と言わせているが、この台詞は、大学の大衆化という問題を考えるにあつて重い意味をもっている。大学紛争において学生たちが葬り去ろうとしたのは、まさに、「知識人」こそ「エリート」でなければならず、「エリート」には世界の「統合者」として「真の批判、真の自由」をもたらし続ける責任があるというイデオロギーだつたからである。

大学紛争の嵐とともに旧来型の「知識人」像は崩壊し、「エ

リート」という言葉はいやらしい選民意識をもつて権力を行使する連中の蔑称になり下がるわけだが、ここで問題になるのは、そうした「知識人」像の特権的な地位から引きずりおろしたあとに、「真の批判、真の自由」なるものを誰がどのようにして体現していくかということである。あらゆる社会は、ひとつの文化の共通基盤をなす認識系としての「知性」を正当に位置づけ、「知性」に対する畏敬の念をもつことで成立しているのだから、主人が不在になつたからといって、なにかが解決したことにはならないのである。——本稿では、この問題と正面から向き合つた小説として、昭和四十四年から四十五年にかけて社会現象とよべるほどのベストセラーとなり、その後も長期にわたつて若い世代の読者から愛読され続けている庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』（中央公論 昭和44年5月、昭44年5月・中央公論社）をとりあげる。

まるでいい気なおしゃべりのように、あつけらんとした文体で綴られるこの小説には、安保闘争や学生紛争をめぐる騒然とする社会状況も描かれない。烈しい戦禍や紛争にみまわれる世界情勢のなかで日本は何をすべきか、といった政治的課題にも興味なさそうである。作者の庄司薫は、現実の自分より十歳以上も若い世代にあたる高校三年生の主人公を設定しながら、なぜか彼に自分と同じ「薫」という名前を与え、本当は冷

静に観察・判断できる場所から過去を振り返っているのに、まるで、いま自分が青春のまつた、たななで困惑し続けているような粉飾をこらす。佐伯彰一の表現をかりれば、「この作者は、一見若者スタイルをよそおい、若者風の口調で、「大人たちよ、じつはぼくらだつて困惑している。いや、ぼくらこそ困惑そのものだ」と物やわからかに語って見せた。若者たちの代弁者のようであり、じつは大人たちの不安を和らげ、ほぐしてやる役割をも演じた」(「軽み」の批評精神、朝日新聞社編『ベストセラー物語 下』昭53・6)ということになるのだろうが、ともかく、この小説に描かれた若者の日常は、たとえば、同時代に起こりつつあったベトナム戦争、あるいは、文化大革命といった出来事にさえまったく無関心で、遠い(他者)への想像力というもの完全に欠落させている(というより、欠落させているように書かれている)。そのくせ、自分および自分の周辺にいる人間たちとの間に起こる些細な感情のもつれやすれ違いについては、これでもかというほど熟慮し、関係の改善をめざす。そして、小説の語り手は、そんな主人公を自在に操りながら、「知性」とは何かということを平然と口にする。さきに引用した佐伯彰一は、この作品を、石原慎太郎の『太陽の季節』や村上龍の『限りなく透明に近いブルー』などと同じ線上に配置し、それらの背後に敗戦後の日本が歩んだ急速なアメリカ化の痕跡をみているが、

ともかく、そこには、かつての知識人なら与しないようなほんとした語りで、「知性」のあり方が饒舌に(しかも既成のそれに対する批評性を備えたかたちで)綴られているのである。

## 1

『赤頭巾ちゃん気をつけて』の主人公「ぼく」は、全国でもトップレベルの東大合格者数を誇る「日比谷高校」<sup>2</sup>の三年生である。二人いる兄貴がともに東大法学部に通っていることから、何となく、自分もそこに行くのだろうと考えていた。ところが、のんびりしたお正月を過ごしたと思つたとたん東大安田講堂事件<sup>3</sup>が起り東大入試は中止になる。小説は、そんな宙ぶらりんな状況に置かれた「ぼく」が過(こ)す春休みの日(翌日が国立大学の願書締切日にあたる二月九日)を独白体で描いている。周囲の喧騒をよそに、「ぼく」は、高校生活のなかで経験した出来事をふり返ったり、ガールフレンドや家族といった親しい人間たちとの関係性に思いをめぐらせたりしながら、現況をこんなふうに語りはじめる。

ぼくは時々、世界中の電話という電話は、みんな母親という女性たちのお膝の上かなんかにのっているのじゃない

かと思うことがある。特に女友達にかける時なんかがそう  
で、どういうわけか、必ず「ママ」が出てくるのだ。もち  
ろんぼくには（どなるわけじゃないが）やましいところは  
ないし、出てくる母親たちに悪気があるわけでもない。そ  
れどころか彼女たちは、（キャラメルはくれないまでも）  
まるで巨大なシャンパンのびんみたいに好意に溢れてい  
て、まごまごしているとぼくを頭から泡だらけにしてしま  
うほどだ。特に最近はいけない。例の東大入試が中止にな  
って以来、ぼくのような高校三年生というか旧東大受験生  
（？）というやつは、「可哀そうだ」という点で一種のナ  
シヨナル・コンセンサスを獲得したおもむきがある。なに  
しろ安田トリデで奮戦した反代々木系の闘士たちまで、「受  
験生諸君にはすまないと思うが」なんていうほどなんだか  
らこれは大変だ。かくしてぼくたちは、まるで赤い羽根の  
募金箱か救世軍の社会鍋みたいにまわりの中から同情を注  
ぎこまれたうえ、これからどうするの？ 京都へ行くの？  
といった一身上の問題に始まり、ゲバ学生をどう思うとか、  
サンバとミンセーのどっちが好きとかいったアンケート  
までとられて、それこそ、あーあ、やんなっちゃったとい  
うことになるわけだ。それに言い遅れたけれど、ぼくの学  
校が例の悪名高い日比谷高校だということは、同情するに

しろからかうにしろ、すごく手頃な感じがするのではない  
かと思う。

「ぼく」を無上の「好意」で包みこみ、過剰なおせっかいを  
続けることで、「ぼく」が道を踏み外すことなく与えられた役  
柄を器用にこなしているように仕向ける存在。それが「ママ」  
とよばれる母親たちである。わざわざ、「キャラメルまでく  
れないまでも」と注解していることからわかるように、ここ  
での「ママ」には、同時代に流行した「キャラメルママ」とい  
う言葉のイメージが付着している。三田誠広が「戦後思想の高  
揚と挫折」という座談会（朝日ジャーナル）増刊号、昭和56年10月1  
日）で、「東大闘争のとき、キャラメルママというのが出てき  
た。キャラメルをあげるからみんな出てきなさいって言ったお  
ばさんたちですが、あれは非常に本質をついている。というの  
は、ぼくらの母親はだいたい自分の子供だけはエリートにした  
いと、いわゆる教育ママになって、子供に夜食か何か食べさせ、  
ともかく東大へ行きなさいといってきた。一方、子供たちも母  
親にほめられたい、あるいは学校の先生にほめられたいという  
意識で一生懸命勉強してきた。ところが、大学へ入ったとたん、  
そういう母親の価値観の中からほうり出されてしまう……」と  
解説しているように、ここでの「ママ」は愛情というかたちの

抑圧によつて子どもの自立を妨げるものの代名詞なのである。

江藤淳が『成熟と喪失——母の崩壊』(昭和42年6月・河出書房)

のなかで、「母と息子の肉感的な結びつきに頼っている者」に「成熟」はないと断言し、「自分が母を見棄てたことを確認した者の眼は、拒否された傷口から湧き出て来る黒い血うみのような罪悪感の存在を、決して否認できないからである。／『成熟』するとは、喪失感の空洞のなかに湧いて来るこの『悪』をひきうけることである。実はそこにしか母に拒まれ、母の崩壊を体験したものが『自由』を回復する道はない」と論じたこの時代。昭和四十三年の東大駒場祭に採用されたポスターにおいて、高倉健の仁侠映画をもじつて付けられた「とめてくれるな／おっかさん／背中のおちようが／泣いている／男東大どこへ行く」というコピーが大きな話題を呼んでいたこの時代。無知なもの、未熟なものへの慈愛という有無をいわせぬ(正しさ)で相手をまなざし、彼を自分の支配下に留まらせようとす「ママ」は、いかにも始末の悪い存在にほかならない。

だが、主人公の「ぼく」は、そんな「ママ」たちの無遠慮な愛情を迷惑がりながらも、そこから逸脱しようとせず、一定の距離をとりながら共存する若者である。逆にいえば、自分に直接的な危害を加えない限りにおいて、「ぼく」は「ママ」たちの振る舞いを許容し、理解しようとしてとめているのである。こ

れは、作者・庄司薫が「連合赤軍」(『バクの飼主めざして』昭和48年6月、講談社)というエッセイで用いた「『キャラメルママ』的発想」という言葉にも通じている。彼は、浅間山荘事件の現場に駆けつけた犯人の母親が、「早く出てきてちょうだいよ。ごはんこしらえて待つてるからね。みんな丸くなつて輪になつて食べましょう……」と呼びかけたことに言及し、この言葉は「世の識者の嘲笑をかつた」としたうえで、だが、「ぼくはそこになにか妙に心を動かされるものを感じてしまった」と述べる。そして、窮状に陥っている犯人を山荘から引つ張り出すためには、「一緒にごはんを食べようと『呼びかける』のが最も効果的」だったかもしれない、と類推する。ここで庄司薫が問題にしているのは、言葉の客観的な意味合いや発話されたときの状況ではなく、その言葉が相手の心にどのように響くかということである。こうした問いかけをすることで、彼はむしろ、あたりまえのように「キャラメルママ」たちを「嘲笑」した「世の識者」たちに疑問を提示しているともいえる。他人を「可哀そうだ」と言つてのける人間は、たいていの場合、その思いあがりやを糾弾されることになるのだろうが、庄司薫の場合は、そのようにして物事を単純化し、他人に「可哀そうだ」と言つてはいけなくと決めつける行為自体を疑つてかかるのである。本文中には、いつも口うるさく「ひとに迷惑かけちゃだめよ」と

叱って子ども扱いする母親について、「日常的な感じでこの民主主義を考えると、どうもこの『おふくろ的錯覚』をあまり出られないような気がしてくるわけなんだ」と感じ、このままで「実につまらない若者になる」という予感を抱きながらも、いまだ自分の明確な考えをまとめきれない。「ぼく」自身について、せいぜい『「ひとに迷惑かけちゃだめよ』で精一杯やっていく他ないのじゃないか」と慰める場面があるが、「ぼく」という主人公は、つねにそういうかたちで思慮し続け、懷疑を棚上げにせよと迫る誘惑の声に抗うのである。

そんな「ぼく」が「ママ」たちと同じように好奇の視線を送るのが、東大入試の中止を引き起こした当事者である大学紛争の「闘士」である。彼らは、共産主義革命を叫んで東大安田講堂を占拠したにもかかわらず、「受験生諸君にはすまないと思うが」などという附けたコメントをしている。さきほど登場した「世の識者」なら間違いなくその欺瞞を指摘するだろう。

だが「ぼく」は、「これは大変だ……」と語るだけで、「大変だ」と思っている自分の内面をそれ以上に言語化しようとしな

り。そして、いつけん自分の判断を保留しているようにみせかけながら、「トリブ」「サンバ」「ミンサー」といった言葉だけはおきつつちりカタカナ書きにして茶番劇の滑稽さを滲ませておく。島田雅彦の「優しいサヨクのための嬉遊曲」(「海燕」昭和58年6月)

が登場したとき、「左翼がサヨクになるとき」(すばる)昭和60年6月〜61年7月、『左翼がサヨクになるとき——ある時代の精神史』昭和61年11月・集英社)を書いた磯田光一は、「模造」の構造を露出し続ける作家と規定し、「島田雅彦における模造人間」の問題は、この観念の主体化にみられる構造を、「模造」という理念を通じて無限に対象化してゆく装置なのである。政治運動において党派を形成する概念のシステムは、明確に観念のかたちをとらずに、イメージやノスタルジアによってもあらわれる」と述べたが、庄司薫もまた、党派性の違いを際立たせることに無駄なエネルギーを費やしていた活動家たちをカタカナ書きにして茶化すことで、そうした運動、あるいは、同時代を覆っていた左翼イデオロギーそのものを「模造」化しているのである。

ところで、主人公の「ぼく」とほぼ同じ時代の東大生であり、前出「とめてくれるな／おっかさ／背中／背中のいちょうが泣いている／男東大どこへ行く」のポスターを作製した橋本治は、この頃の東大を次のように回顧している。

私は、1968年の大学紛争が、受験勉強と同じものだとはいえない。しかし、そこに吸い込まれて行った人間達の吸い込まれ方のかかりは、受験勉強に吸い込まれて行った時のノリと同じだったと思っている。スト中の「平和」



と、駒場祭前後の「緊迫」を見ていて、私はそう思った。

1週間でコロツと顔つきが変わった人間は、いくらでもいた。私は、そういう「真実への目覚め方」がいやだ。硬直した顔つきの中に、高校3年の時に見た顔がいくらでも浮かんだ。「もうそういうものはないはずなのに」と思っても、でも、私の前には3年前の時間が甦って来た。私はもう、それがいやだったし、こわかった。／「バカか、お前は——」という視線に、私は慣れている。1965年は、そういう視線の中で1年間、素知らぬ顔をして生きて来た。しかし、1968年の大学は、もう1965年の高校ではないのである。そこには、もう「受験勉強」という敵役がない。1965年には、「お前らそれでいいのかよ！」と言って、「どうしたって自分の方が正しい」と主張することだつて出来た。1965年の同級生は、「受験勉強」という敵と結託していたのである。しかし、1968年の学友達は、「社会の不合理」と戦っている。どうしたって私はブが悪い。「どのセクトがどうで」とか、「全共闘とはなにか」が分からなくても、それくらいのことでは分る。1968年の私は、「社会の不合理と戦う人間の姿勢が理解出来ないただのバカ」なのである。そこまでは分かっている。でも、やっぱり私は、「いや」なのである。「二とめ

てくれるなおつ母さん」を描いた男の極私的な1968年『1968年・グラフィティ バリケードの中の青春』平成10年11月・毎日新聞社

大きな力に吸い込まれていった人間は、自分たちがなにかに吸い込まれてしまったと思ったりはしない。それどころか、自分たちの選択は正義であり必然であると考えてそこに与しない人間に牙をむく。橋本治は、高校三年生のときに経験した受験勉強と東大に入学したあとに同級生たちがなだれ込んでいった大学紛争が、ともにそうした吸引力をもっていたことに思いをめぐらせ、ほんの短い間に「硬直した顔つき」をはじめ、自分とは価値観の違う人間を「バカか、お前は——」と罵倒する人間の「真実への目覚め方」がいやだ」と語る。また、受験勉強には「敵」と結託しているようないかがわしさがあつたから「自分の方が正しい」と反論する余地があつたが、大学紛争の場合は、向こうに「社会の不合理」と戦っている」という大義があるゆえ、自分は「社会の不合理と戦う人間の姿勢が理解出来ないただのバカ」とみなされたと回顧している。

だが、ここでさらに注目したいのは、そうしたマイノリティとして生きてきた橋本治が、当時の心境としてではなく、その文章を書いている時点（三十年後ということになる）での自己認識として「でも、やっぱり私は、「いや」なのである」と突っぱ

ねている点である。橋本治の場合は、いかにも軽薄さを装って「いや」という言葉ですべてを片付けているが、彼はあの頃もいまもこうした連中を「いや」だと思っているのであり、そうした大きな力に吸引されずに生きてきたことに強い自負をもっているのである。

そして、『赤頭巾ちゃん気をつけて』を書いている作者・庄司薫のなかにある視線もまた、こうした回顧性をもっている。昭和三十三年、東大の二年生だったときに本名の福田章二で書いた『喪失』が第三回中央公論新人賞を受賞（『駒場文学』第9号に発表したものを改稿して応募。受賞後「中央公論」昭和33年11月に掲載）し、その前年に書いていた『蝶をちぎった男の話』（『東京大学教養学部学友会機関誌「学園」第15号・昭和32年）、法学部への進学後に書いた「封印は花やかに」（『中央公論』昭和34年7月）とともに作品集『喪失』（昭和34年9月・中央公論社）に収録したのち、「僕は今そこに、僕の出発点としての過去の偉大な全てに対する卑小感が眩きのうちに次第に確認されていく過程を見るように思う。自らの個性を確立し終ることが単なる悲壮美に止まることの予感、自らの形式を他に強いることが単なる飛躍の確証に過ぎぬことの羞恥、それらの成立過程を支える稀薄で緩慢な時代の感覚からくる現実そのものへのさまさまに複合された卑小感。／そして今僕はここに一つの作品集を持った。僕はこの出

発、過去の偉大な全てによって一つ一つ花やかに封印された僕の出発を改めて確認する」（『喪失』「あとがき」前出）という言葉を残して、いったん文学の世界から「総退却」（『喪失』「新版あとがき」昭和45年5月・中央公論社）した庄司薫は、自分が小説を書いた動機を「自己否定衝動の客体化」（『若さという名の狼について』『狼なんかこわくない』昭和46年12月・中央公論社）とよぶ。「若さ＝純粋・誠実＝傷つきやすさ・弱さ」という公式の「陥穽」から抜けだし、傲慢で攻撃的な「加害者」性を小説に描くこと。小説を書きながら、同時にそれを書いている現実の自分を「客体化」して確認すること。そして、そうした行為が精神衛生上あまりよくない空しいものに思えたときには、「自由」になることとの企てとして、いったん「総退却」すること。それが庄司薫のスタイルであり、同様の方法意識は十年という時間を経て発表された『赤頭巾ちゃん気をつけて』にも引き継がれている。この小説に至る十年間を語った文章のなかで、彼は、

……ぼくたちを敵味方に峻別して闘わせることになるさまざまな政治思想体系（政治的信条といってもイデオロギーといってもかまわない）は、そもそもは他ならぬこのぼくたち人間のためにあるのは言うまでもないことだが、混乱と動揺の中では、常にその排他的側面のみが強調されて、

いわば境界における党派的戦闘ばかりが激化するような形になってしまふ。(中略) その思想が本来抛つてたつているはずの「みんなを幸福にするにはどうしたらよいか」といった最も素朴でしかも重要な目的そのものが見失われていく。いや、それどころか、そのような戦闘が繰返されていくうちに、他者肯定はすなわち「敵を愛する」という現実的には馬鹿ばかしい甘さだと考えられるようになり、そこに恐るべき魂の荒廃が進行していく……。／『赤頭巾ちゃん気をつけて』で十年ぶりに筆をとつたぼくの前にあつたのは、ぼくの友人たち先輩たち、そしてなによりもこのぼく自身のなかにあるこのような魂の荒廃への予感だつたとぼくは思う。(時代の児の運命、「サンデー毎日」昭和44年12月28日)

と述べている。六〇年安保以降の学生紛争を目のあたりにし、「恐るべき魂の荒廃」が進行していく状況を予感していた庄司薫は、十年という時間のなかで蓄積した認識を集約して一九六九年(昭和44年)を生きるもうひとりの「庄司薫」を造型し、橋本治がそうしたように、その場に生きる臨場感とそれを「客体化」された位置から回顧的に検証するまなざしを同時に実現しようとしているのである。『赤頭巾ちゃん気をつけて』がベス

トセラーになつた時代は、それと並行して、樺美智子『人しれず微笑まん 樺美智子遺稿集』(昭35年10月・三一新書)、奥浩平『青春の墓碑 ある学生生活動家の愛と死』(昭40年10月・文芸春秋新社)、高野悦子『二十歳の原点』(昭46年5月・新潮社)をはじめとする学生運動家たちの遺稿集が連鎖的に発表されており、樺美智子から奥浩平へ、奥浩平から高野悦子へと、セクト間の抗争に苦悩する若者が自分の前を生きた若者の手記に感化されて再び新しい手記をまとめる……という奇妙なブームが起こっているが、庄司薫の場合は、そうした感傷的な生/死の跨ぎ方とは決定的に違う方法を選択している。

この文章の結末で、彼は、他者否定の「畏」が構造的にしかけられている状況のもとでは消極的にみえようとも「したたかな長期戦」を覚悟して「畏」を回避し続けるしかないと謳う。知識人を「亡命者」に見立てて、「亡命者はいろいろなもの、あとに残してきたものと、現実がいまここにあるものという、ふたつの視点からながめるため、そこに、ものごとを別箇のものとしてみない二重のパスpekティブが生まれる。新しい国の、いかなる場面、いかなる状況も、あとに残した古い国のそれとひきくらべられる。知的な問題としてみれば、これは、ある思想なり経験を、つねに、いまひとつのそれと対置することであり、そこから、両者を新たな思いもよらない角度からなが

めることにつながる」と述べたのはエドワード・W・サイード  
『「知識人とは何か」』(訳)大橋洋一、平成7年5月・平凡社)だが、彼は、  
性急で短絡的な決着のつけ方、あるいは、当事者としての自分を  
追い込んでその苦悩を吐露していくような表現が垂れ流しに  
されていた時代にあつて、それを徹底的に退け、「亡命者」と  
して生きることに賭けているのである。

## 2

こうした点をふまえながら、もう少し本文の記述をたどつて  
みよう。

小説の舞台になつている「この日」、「ぼく」はスキーのスト  
ックにひつかけて足の爪を剥がし、幼馴染のガールフレンドで  
ある由美ともケンカして、一日の予定を台無しにしてしまふ。

「ぼく」が由美にいだいている感情は、「惚れてるとか恋して  
るとかいう気持」とは微妙に違つている。もちろん「セックス  
アピールがないというわけじゃあない」が、「誰もいない淋し  
いうちのそばの道を歩きながらふと手をのばしたりすると、あ  
いつもちようど手をのばしてくれたり」することを期待する相  
手である。だから、普段は気まぐれで大胆な彼女を心配する「ボ  
ディガードの心境」でつき合つている。江中直紀は「やさし

さ」の始まり——庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』(「新潮  
昭和63年12月)のなかで、「とにかく固着しないこと。大きな物  
語の拒否。いま個々になにかを主張する歌や芝居、服装のかわ  
りに、そのいまをつぎつぎと、かぎりなく風化・拡散してゆく  
風景の遍在。薫クンがそのなかで黄昏と曙の二重性になつて  
いるとしたら、じつは女の子たちこそ、そこ、現在につながる  
時間にびたりと適合しているかのようだ。幼稚園からのガール  
フレンド由美はその代表で、前髪を黄色のリボンでとめてテニ  
スをしたり、やせつぼちでもミニスカートの「やけに色つぼ」  
かつたりする。小学校六年生の春、初潮があつたことを夜遅く  
告げにきて、「あたしを守ってくれる？」と訊ねる。中学二年  
の夏の夜、湖のまんなかのボートの上で、それが最初で最後な  
のだが、ふくらみかけた乳房をみせてくれる。なにかといえ  
ば「舌かんで死んじやいたい気持」になるお天気屋の、その気分  
の変転のままに、薫クンはすっかり翻弄されているのだ」と述  
べたうえで、由美に翻弄される「薫クン」こそは、「青春小説  
の主人公にふさわしい」「遅れてきた少年の典型」だと論じた  
が、なにもものにも「固着」せず、「大きな物語を拒否」し続け  
る彼女が、逆に「知性」、「自由」、「幸福」などといった「大き  
な物語」に「固着」する「ぼく」を相対化し、無言のうちに批  
評してしまう場所に立つていることはまちがいない。由美は、

立派な「男の子」として生きようとする「ぼく」の「やさしさ」を、ときには平然と受けとり、ときには頑なに拒絶する聞き分けのない主人なのだ。

そんなことを考えている「ぼく」の脳裏に突然うかんでくるのは、いまから二年以上も前に地下鉄のなかで見かけた女性の記憶である。真向かいの席に座っていたその女性は、「全く自分だけの世界にいるように、ほんとうにもうただひたすら涙を流して静かにしんと泣いていた」。それを見た「ぼく」は、「何もしてやれない」自分を不甲斐なく思いながらもただオロオロする。そして、「彼女の泣き方には、そんな『釣れますか』などと声をかけるようなことが全く無責任だと思わせるようなそんな何かがあったんだ。たとえば、彼女に声をかけるとしたら、彼女がそれこそ泣きやむだけでなく、彼女がすっかり倅せになり、毎月底抜けに明るい笑い声をたてるまでにしてやる覚悟と力がなくてはいけないんだ、とでもいったそんなことを考えさせられるような何かだ」と考え、「女の子」を泣かせるようなことは絶対にはいけないと誓う。「ぼく」は、背伸びびしてみせることを戒め、卑小さも含めた自分という存在を精確に測定するために、敢えてみもふたもないほど愚直で気恥ずかしい表現を用いる。そして、「ぼくが毎日いろんなことにぶつかり、そこで考え感じそして行動するすべて」は「ぼくの体験、

ぼくの知識、ぼくの記憶、ぼくの決意、ぼくの思い出、ぼくの感動、ぼくの夢といった、つまりぼくのすべてとの或るわけの分らぬ結びつきから生まれてくるものなのだ」と理解し、さらに、自分というネットワークを冷静に分析してみようと試みる。

まっさきに思いうかぶのは、「学校群制度以前の日比谷高校の生徒」であることにエリート意識をもつ同級生との関係である。「ぼく」のみるところ、同級生たちのエリート意識には、「優等生だ、秀才だ、エリートだ」という非難」に対して「オレはそうじゃない、オレはこんなに馬鹿です。間抜けです。欠点だらけです、愛すべき男ですとふれまわる」ような、「くだらなさを免罪符のようにアッピール」する「ゴマすり型」と、「みんなの非難に対し、そうさ、オレはどうせ秀才だ、エリートだ、それがどうした」という具合に開き直ってしまう「居直り型」というのがある。また、「やらなきゃならないこと、だけさつきとすまして」あとの能力を芸術や趣味に費やそうとする「趣味型」もいる。「ぼく」は、そのどれもが「気に入らない」と考えながらも、結局は自分も「三つのコースにフラフラ迷いこみそうになつてはストレスで頑張るみたいな生活」をしていることに気づく。『赤頭巾ちゃん気をつけて』が第61回の芥川賞（昭和44年上半期）を受賞したとき、選者のひとりとしてこの小説を絶賛した三島由紀夫は、「いろいろな時代病の間をうろろして、

どの時代病にも染まらない、というところに、正に自分の病氣を見出し、しかもそれが病名不詳で、どう弁解してみても説明してみても、医者にもわかつてもらえない病氣の症状、現代の時世粧をアイロニカルに駆使しながら、「不安定なスイートネス」の裡に表現した才氣あふれる作品だと思ふ。過剰な言葉がおのずから少年期の肉体的過剰を暗示し、自意識がおのずからペーソスとユーモアを呼び、一見濫費の如く見える才能が、実はきわめて冷静計画的に駆使されているのが分かる。「若さは一つの困惑なのだ」ということを全身で訴えているという点で、少しも無駄のない小説というべきだろう」と評し、この「若さは一つの困惑なのだ」というキャッチコピーが単行本の帯を飾っていくことになるわけだが（前出、佐伯彰一の言説もそれを受けている、語り手の「ぼく」が戦略的に選びとつた方法は、ともかくこの三つのパターンのどれにも嵌まることなく、「困惑」する主体としての自分を立ちあげ、根氣よくその「困惑」とつき合い続けることだった。

また、エリートたちに対する「ぼく」のまなざしは、そうした個々人のふるまいだけでなく、エリート意識を支え、拡大再生産していく力がどこからもたらされるのかという点についても向けられる。「ぼく」は、この頃の「日比谷高校」について、「気取っていて見栄っばりで意地っばりで紳士面していて受験

勉強どこ吹く風で芸術などというキザなものに夢中でまわりくどい民主政治にえらく熱心で鼻持ちならぬほど礼儀正しくて馬鹿みたいに女の子に親切で、つまりどこから見てもいやつたらしい生徒」たちがあふれているだけでなく、「いやつたらしい生徒」たちを見守りながら「みんなその個性を自由にのぼしている」などと勘違いする教師たちがいて、それぞれが結託して「大インチキ芝居」を繰り広げていたと語る。

さきに述べた「亡命者」という観点からすれば、十年先といま現在に二重化されたまなざしをもつ「ぼく」は、ものごとをあるがままに眺めるのではなく、それがなぜ、いかにしてそうなったのかを見極めようとする主体である。そんな「ぼく」の友人である小林は、田舎から越境入学してきた「秀才なのだけれどなんとなく劣等感が強い」クラスメイトの中島という男をひきあいにして、「田舎から東京に出てきて、いろいろなことにことごとくびつくりして深刻に悩んで、いろいろな被害妄想でノイローゼになって、そしてあれこれ暴れては挫折し暴れては失敗し、そして東京というか現代文明の病弊のなかで傷ついた純粋な魂の孤独なうめき声かなんかあげるんだ」、「つまりなんらかの大きい弱点とか欠点とか劣等感を持つていてだな、それを頑張つて克服するんじゃないかと逆に虫メガネでオーバーに拡大してみせればいい。しかもなるべくドギツク汚な

く大袈裟にだ」といい、それを「刺激の絶対値」をめぐる競争とよぶ。そして、「感受性も含めた知性に或る誇りをもっていたりすると」、それだけで「もうおまえはひつこめ、おまえの時代じゃない、おまえは邪魔だ、おまえが悪いんだ」と罵られるような時代にあつて、自分ももう、「優等生だつてことすなわち人間味がないつて意味にされる」ような不条理な競争から降りるつもりだと語る。また、「ぼく」に対しては、こんな時代でもちゃんと「力を養い鍛えていく方法」を知っている「おまえ」が、「悠然と堂々といわば歴史の真つただ中を落ち着いて進んでいってくれないければ、おれのようなほんとうの異端者は困る」と叱咤する。

小林から、なにか「かつぎきれないほど重い荷物のようなもの」を預けられたように思えた「ぼく」は、爪の剥れた足をひき摺りながら、ふらりと夕方の街に飛びだす。そして、「逃げて逃げて逃げまくつて、確かに馬鹿ばかりさのまつただ中で明らかかな犬死なんかはしないと、それで結局ぼくはどうなるというのだろう。たとえばその結果、多くのどうでもいい問題から逃げきり、そしてほんとに重大な問題だけを見つけたとしても、その時にはもうそれを解決する力も時間もなかつたということになったら、いったいどうなるというのだろう。それにそもそもこのぼくに、そんなどうでもいいことから逃げて逃

げて逃げまくるといった或る意味で最も強く難しい生き方をする資格があるのだろうか？」と自問しているうちに、身体のかなかに「不気味な狂気」がジワジワ溢れてくるのを感じる。そんなとき、ヘルメット姿で「意気揚々」としている活動家たちの前を険しい表情で通りすぎた「ぼく」は、「彼らはほんとうに自分の頭で自分の胸ですべてを考えつくして決断したのだろうか」「彼らは、その決断と行動をたんに若気の至りや青春の熱い血の騒ぎや欲求不満の代償として見殺しにすることなく、つまりは一生挫折したり転向したりすることなく背負い続けていけるのだろうか」という思いにかられ、

……彼らの果敢な決断と行動の底には、あくまでも若さとか青春の情熱といったものが免罪符のように隠されているのだ。いざとなればいつでもやり直し大目に見てもらい見逃してもらい許してもらえろという免罪符が。若き日とか青春といったものを自分の人生から切り離し、あとで挫折し転向した時にはとかげの尻尾みたくに見殺しにできるという意識が。もともと過去も未来も分けられぬたつた一つの自分を切売りし、いつでも自分を「部分」として見殺しにできる恐るべき自己蔑視・自己嫌悪が隠されているのだ。

と確信する。一緒に歩いているだけであれば、「幸福なあなた  
かい気持」になれたガールフレンドの由美のことも、本屋に並  
んでいる膨大な書籍の山も、きらびやかなネオンの下を楽しそ  
うに行き交う人々も、なにもかも疎ましくなり、「ぼく」は生  
まれて初めて、「この都市この社会この文明この世界」に対す  
る抑えきれない憎悪と敵意をもちはじめ。はじめは小さな苛  
立ちに過ぎなかったものが加速度的に増幅しはじめ、「ぼく」  
はどんどんダメになつていく。

作者・庄司薫は、「ぼく」がその危機を逃れ、立派な「男の  
子」として歩んでいけるようにするために、ひとつの寓話を用  
意し、ひとりの少女を登場させる。少女は、『かくや姫』とか  
『シンデレラ』とか、そういった「素敵なお話」が書かれた本  
を買うために「ぼく」の前を突つきろうとして、爪の剥げた「ぼ  
く」の足をみごとに踏み抜く。激痛を堪えながら精一杯の笑顔  
をつくつてみせる「ぼく」の前で思いつめたような表情をする  
少女。「持てる知識を総動員して」、「童話作家」になつたよう  
な気持ちでいろいろなお話をきかせてあげる「ぼく」。嬉しそ  
うに目を輝かせる少女と手をつないで歩きはじめた「ぼく」が  
「なんの本を買うの？」と訊くと、少女は屈託なく「あかすき  
んちゃん」と答える。この小説は、最後の最後でようやく「赤

頭巾ちゃん気をつけて』というタイトルの由来が明らかになる  
のである。

この少女とのふれあいによって、「ぼく」は心のなかには喜  
びが「いっぱい溢れて」きて、街角の「すべての人たち」を  
いとおしく眺められるようになる。すべてのものが「それぞれ  
の思いそれぞれの言葉をいっばいに抱えて、それぞれの表情で  
ぼくをとり囲みぼくに話しかけ微笑かけ、ぼくに何かを、なに  
かとも言葉にはならないような何かを教え知らせ贈物にしよ  
うとでもしているように」思えてくる。この後、小説は、由美  
と仲直りして「そつと手をつないでゆつくりゆつくり」と歩き  
はじめた「ぼく」が、大きくて深くてやさしくてたくましい男  
になろうと思いたち、その「熱い胸の中から生まれた」決心は  
きつと「ぼく」を支え続けてくれるに違いないと確信する場  
面で終わるわけだが、そうしたあられもない寓話の構成のなかで  
作者・庄司薫が特に含みをもたせているのは、たとえば、次の  
ような描写である。

……赤頭巾ちゃんなんて誰でも知っている話だけれど、も  
のによつてずいぶんちがつているのだ。たとえばグリムで  
は、狼に食べられた赤頭巾ちゃんとおばあさんは猟師とか  
木こりに助けられるのだが、ペローでは大い食べられて



しまったままで終ってしまう。それから狼に出会って怖が  
ってふるえる赤頭巾ちゃんとか、狼に脅かされておばあさ  
んちのドアを叩く合図を教えてしまう赤頭巾ちゃんとか、  
「見知らぬ人を信じちゃいけません」とか「道草しちゃい  
けません」なんていう教訓をやたらと繰返して罪の意識に  
悩む赤頭巾ちゃんとか、いろいろ変なものもあるのだ。そし  
てぼくは（詳しく話したらきりがないのでやめるけど）、  
このちっちゃな道草好きのやさしい女の子に、素敵な赤頭  
巾ちゃんのお話を選んでやりたかった。見知らぬ狼さんを  
見てもニコニコしてこんにはなんて言ったり、森の中に  
咲いているきれいなお花を見てついおばあさんのために摘  
んでいつてあげようと道草したり、そして狼に食べられて  
もあとでおなかからニコニコして出てくる可愛い素直な赤  
頭巾ちゃんを。

ここには、この小説のなかで「ぼく」がたびたび言及する「知  
性」というものに対する見方が比喩的に語られている。まず、  
それは「誰でも知っている」ようにみえて実際は多様性にみち  
た世界である。逆にいえば、そうした多様性を受け容れること  
によって、はじめて「赤頭巾ちゃん」の世界は了解可能となる。  
そこには、ひとつの限定された正しきがあるのでもなければ、

より正しいかどうかをめぐる序列があるわけでもない。いわば、  
「変なもの」まで含めて雑多な意味が散乱しているような状態  
である。また、雑多なことから素敵なお話を「選んで」あげよ  
うとする「ぼく」の視点に立つと、他者にとつてもつともよい  
結果になるであろうことを自分の責任において遂行する勇気が  
試されているともいえる。時流におもねったり、外的な情報に  
従ったり、権威からのお墨つきをもらおうとしたりせず、自分  
の心の命ずるままに一冊の「赤頭巾ちゃん」を選んであげる「ぼ  
く」は、このときはじめて誰かのために「知性」を役立てると  
いう経験をするのである。

だが、ここには、そうした「ぼく」の認識レベルとは別に、  
「赤頭巾ちゃん」とよばれる物語の主人公が経験する出来事そ  
のものを「知性」獲得の営みとして表現する狙いもある。つま  
り、「見知らぬ狼さん」を見てもニコニコしてこんにはなんて  
言ったり、森の中に咲いているきれいなお花を見てついおば  
あさんのために摘んでいつてあげようと道草したり、そして狼に  
食べられてもあとでおなかからニコニコして出てくる可愛い素  
直な赤頭巾ちゃん」のふるまいそのものに、「ぼく」が希求す  
る生き方が託されているのである。他者に対して自分を開いて  
いくこと。たとえ「道草」になろうとも、誰かを喜ばせるため  
に労を惜しまないこと。そして、どんな困難につきあたっても

めげずに耐えぬき、その存在そのものが周りを幸せな気分にする……。グリム童話に描かれた「赤頭巾ちゃん」には、ひとつの戯画として、「ぼく」が大切に育んでいこうとするものが照らしだされている。

### 3

ここまで、『赤頭巾ちゃん気をつけて』のプロットを順にたどりながらそこに内包する問題を明らかにしてきたが、この小説は、「ぼく」という主人公が体験した一日の出来事としてのプロットとは別に、「ぼく」自身が自分にとって最も大切なものを見つけ、それをよりどころに生きていこうと決意するまでのプロセスを語る思考ノートのような側面がある。その典型が、東大法学部に通う下の兄貴が紹介してくれた「素晴らしい先生」とのふれあいであり、その「先生」を介して膨らんでいく「知性」というものへの憧憬である。

「ぼく」は高校二年生のとき、下の兄貴に向かって「悪名高い法学部は要するに何をやってるのか」と尋ねたことがある。兄貴はそんな「ぼく」に法哲学の本と「ガリ版ずりの思想史の講義ノート」をさしだし、真面目な顔つきで、「要するにみんなを幸福にするにはどうしたらいいかを考えているんだよ」と答

える。兄貴から本と講義ノートを借りた「ぼく」は、それを夢中で読み「相当にまいつて」しまう。そんな「ぼく」が「ガリ版ずりの思想史の講義ノート」をつくった「先生」とバツタリ出くわしたのは、「おとしの初夏の夕方」、兄貴と銀座を歩いているときだった。「やあ、やあ」という感じで食事やお酒に誘われているうちに、なんだか「話はずんで」、「とうとう真夜中すぎまで」付き合うことになるのである。そのときの「一目惚れ」は、次のように語られる。

たとえばぼくは、それまでにもいろいろな本を読んだり考えたり、ぼくの好きな下の兄貴なんかを見ながら、（これだけは笑わないで聞いて欲しいのだが）たとえば知性というものは、すごく自由でしなやかで、どこまでものびやかに豊かに広がっていくもので、そしてとんだりはねたりふざけたり突進したり立ちどまつたり、でも結局はなにか大きな大きなやさしさみたいなもの、そしてそのやさしさを支える限りない強さみたいなものを目指していくものじゃないか、といったことを漠然と感じたり考えたりしていたのだけれど、その夜ぼくたちを（というよりももちろん兄貴を）相手に、『ほんとうにこうやってダベっているのは楽しいですね。』なんて言っつていつまでも楽しそうに話し

続けられるその素晴らしい先生を見ながら、ぼくは（すごく生気みたいだが）ぼくのその考え方が正しいのだということを、なんていうかそれこそ目の前が明るくなるような思いで感じとったのだ。そして、それと同時にぼくがしみじみと感じたのは、知性というものは、ただ自分だけでなく他の人たちをも自由にのびやかに豊かにするものだというようなことだった。

この「素晴らしい先生」というのは、同時代の知識人の代名詞でもあった丸山眞男である。本文中でクラスメイトの小林が、「着々と勉強をしていって、そして自然に東大へ入って、法学部かなんかで今度はまた例のおまえが一目惚れした先生かなんかについて、アリストテレスだヘーゲルだホッブズだ、それかなんだったっけ、荻生徂徠だ本居宣長だなんぞとコツコツやって、そしておんなじ調子で教授になったり……」、「たとえ表面では棒ふり学生がいくらデカイ顔したって、世の中が何言ったって、お前の惚れた先生やなんかがビクともしないことぐらいいは分っているんだ」などと発していることからそれは明らかである。だが、作者・庄司薫は、それが丸山眞男以外の誰でもないことを理解してもらえるように書きながら、丸山眞男という固有名詞だけは注意深く外している。実際に東大法学部で丸山眞男の

教えを受け、「60の会」にも参加し、昭和四十一年には、この会の機関誌「60」に『赤頭巾ちゃん気をつけて』の原型となる短篇小説を発表して仲間たちから「えらく評判がよかった」（十年のち）ことに気をよくして再び小説を書きはじめるきっかけをつかむなど、庄司薫にとつての丸山眞男は師以外のなにものでもないのだが、彼はその丸山眞男を、政治思想史研究のリーダー、あるいは、自分の思想や理念にもとづいて現実社会を啓蒙しようとする発言者としてではなく、偶然、街で会った自分の学生とその弟を相手に、夜中まで付き合っただけそうにお喋りする人物として描く。そこには利害関係もなければ特定の集団を構成していくような結びつきもない。ただの高校生に過ぎない「ぼく」を前に何時間も楽しそうにお喋りしてくれた「先生」が「ぼく」に与えてくれたものは、自由にものを考え、自由に語り、自由な関係を生みだしていくことだった。「ぼく」は、そこに「知性」というものの果てしない魅力と可能性を看取る。「知性というものは、すごく自由でしなやかで、どこまでものびやかに豊かに広がっていくもの」で、「なにか大きな大きなやさしさ」と「それを支える限りない強さ」をめぐしているものだ、という云い方。あるいは、そういう知性をもっている人間は「ただ自分だけでなく他の人たちをも自由にのびやかに豊かにする」ことができる、という実感。ここに配置さ

れている言葉たちは、どれもこれも抽象的で感覚的で比喩的なものばかりである。「ぼく」にとつての「知性」とは、どこかに書かれていたり、なにかを調べていくことで明らかになつたりするようなものでないというだけでなく、論理的に説明しようと思つてもうまく表現する言葉がみつからないような何かなのである。

ところで、「ぼく」がここで直観する「知性」の魅力というのは、教師と生徒の間で行われる一般的な教育⇨陶冶とはかなり趣を異にしている。たとえば、ヤスパースは『大学の理念』（訳「森昭、昭和30年6月・理想社」）のなかで、教育の基本形態は、権威をもつた著述家の書籍や公式にまとめられた教材のもとで伝達される（スコーラの教育）と、尊敬と崇拜を集める権威ある教師がその能力によつて生徒を従属させる（師匠による教育）と、教師と生徒が平等かつ自由な立場で徹底的な問答を続ける（ソクラテスの教育）に分類されると述べ、それぞれに有効性を認めていたが、その「先生」は法学部のマスプロ授業において「ガリ版ずりの思想史の講義プリント」を用いて自説を講義しているらしいし、喫茶店でのお喋りが「権威」によつて「ぼく」らを従属化させるような関係になつているとも思えない。また、「ぼく」たちは、べつに対等な立場から問答できるわけではないから、（ソクラテスの教育）というわけでもないだろ

う。つまり、「ぼく」が「先生」との関係性において享受した豊かさというのは、教育的な取り組みのなかで何らかの真実が焦点化されていくようなものではなく、「先生」の言葉や身ぶりに耳と目を傾けているだけで「ぼく」のなかに得体のしれない衝動がうごめき、いつか自分も「先生」が見ている世界を覗けるようになりたいと感じさせるような、そう考えるだけで自分のなかに様々な可能性を発見できるような、そんな未来への投機性を備えているのである。「教育の心理学化」（現代思想 平成15年4月）を書いた檜村愛子は、人間としての教師が教育の場面において学習者に対して果たすことのできる最大の効果は「期待」と「幻想」を与えることだとして、

近代の教育システムと共に誕生した教師は国家・学問といった超越的審級によつて公的に保証された代理審級であると同時に、学んだ実践の後で学習者の意識の中に生じる事後的心象であるとする。しかしここで教師の心象は学びが完全に習得された後でのみ生じるものではないだろう。人間としての教師の最も大きな効果とは幻想を与え支える能力である。（中略）教師が何か部分的な知を供与した時、実際にはその部分知を通して学習者はその背後に全体知の一つのイメージを投影するだろう（このイメージの投影を

可能にするものが隠喩である。学習の欲望とはこのように幻想と接合しておりウイニコットにおいて見たように他者の全能の幻想がそこで機能しなければ、人は単語を覚えたりそれ自身は意味のない数式を獲得しようとはしない。基本的に学習や現実原則は人間にとつて不快なものである。もちろん新しいことを知ることや一つの知の体系を獲得したり積み上げることの喜びを人間は知っているが、それとて一定の学習の過程を必要とするものである。そのためには新しいことが解るかもしれないという期待や幻想がここでも必要である。転移とはこうして常にすべてが今すぐ解ること（それは原理的に不可能であるから）を留保しそれを習得する時間を生み出す（mediate）幻想と期待の空間である。

と論じたが、「ぼく」と「先生」との関係もまた、ある意味ではそれと相似形を描いているだろう。「ぼく」は「先生」との対話的な関係を通して、「すべてが今すぐ解ることを「留保」する勇気を与えられ、まさに、「それを習得する時間を生み出す（mediate）幻想と期待の空間」へと導かれていったのである。本文のなかで、あの日のことを思い出した「ぼく」は、「たとえば知性というものがほんとうにぼくの考えるような自由な

もので、もともと大学とか学部とかには無関係なものであるとすれば、ぼくがたまたま（恐らくぼくの幸運から）決めていた東大が入試中止になったからといって、大あわてでガタガタするのはおかしいじゃないか。（中略）ぼくは、結局一つの賭けをしてみようともいう気になったのだ。つまりこの入試中止をむしろ一つのチャンスのように考えて、ぼくはぼく自身を（そしてちよつと大袈裟だが敢えて言うならばぼくの知性を）自分の力でどこまで育てることができるとかやってみよう」と考えるが、それは「先生」から与えられた「幻想と期待の空間」に対する「ぼく」なりの応答だったといえるだろう。<sup>10</sup>

だが、超越的な「知性」を備えた師が特定の誰かに自分のあとを託すにふさわしい才能を見いだし、その選ばれた「若き」に向けて特権的に「知性」の伝授を行つていく密室での継承劇は、そこに立ち入ることさえ許されぬ大衆を蔑視し、まるで「知性」の独占状態をつくりだしているようにみえる。この点について辛辣な批判を加えたのが高田里恵子『グロテスクな教養』（平成17年6月・ちくま新書）である。

高田は、まず単行本の帯にある「女の子にもマケズ、ゲバルトにもマケズ、男の子いかに生くべきか」というコピーに嘔みつき、ここでいう「男の子」というのは「良家出身の学歴エリートだけ」を対象としており、小説そのものが「紛うかたなき

教養論」になっていると指摘する。そして、「いま改めて読みなおしてみると、これほど不愉快な、あるいは薫くんの口癖の言葉を使えば「いやつたらしい」小説はなからう、とさえ思えてくる」と感想を述べたうえで、「都会という舞台、アッパーミドルクラスの文化と生活様式、特権の上級学校」という、かつての青春小説の条件をすべて兼ね備えたこの小説こそ「青春の終焉」を飾るにふさわしい作品だった」と続ける。高度経済成長期の日本において、都市部のアッパーミドルクラスが獲得した経済的な豊かさ、文化、生活様式といったものが、「青春」という困難をひたむきに駆けぬけるような生き方そのものを困難にしてしまったというわけである。また、さきに掲げた丸山眞男とおぼしき「先生」とのやりとりについては、「自由なる主体の形成、自立した個人の確立」を標榜した丸山眞男の教養主義が「一九六〇年代の高度成長を経た大衆社会において急速に効力を失ってしまった」状況において、この小説は「丸山眞男のなるものの復権」をよびかけているのだと論じる。

この書は、「教養」というものもっている「プロテクスな」側面をこれでもかと痛罵していくスタイルで統一されているため、「みんなを幸福にするにはどうしたらいいか」などという言葉を平然と使って「男の子」の「やさしさ」をばら撒く庄司薫の傲慢さや独善性は格好の標的になるのだろうし、小説内の

事実関係にいくつか誤解があることを除けば、このあたりまでは本文の核心的な問題を鋭く突いているように思う。だが、このあとの記述では、作者が十年も前に本名・福田章二の名前で発表した「喪失」に対して、「階級秩序を擁護し、そのなかで「最高をあたえられよう」という自らの処世的な願望に文学的な装飾をこらしている」（「新人福田章二を認めない」、「新潮」昭和34年1月）と批判した江藤淳や、三十三年ぶりに四部作<sup>11</sup>を読みなおして、「多くの高校生が当時政治的にも性的にも感じていた、追い詰められたような危機意識は、庄司薫の四部作のどこを探しても感じられない。それはむしろ、より年長の読者に対して、優柔不断ではあるが保守的な十七歳の少年の映像を差し出すことで、ある種の風俗的安心感を演出してきたような気がしてならない」（『ハイスクール1968』平成16年2月・新潮社）と述べた四方田犬彦の援用で議論が展開し、「四方田の言うとおり、薫くんじしんが、何もかも見通した年長のおじさん、すなわち教養論を書く人なのだ」といった具合にまとめられていく。この小説は、高田が批判するようなエリートたちの不当な使命感や、「いかに生くべきか」という問題を独占してきた教養人たちがもっている「いやつたらしい」ところをあらかじめ折込みみずみのところから出発し、自分は「いやつたらしいお行儀のいい優等生」であると名乗って憚らない主人公が、様々な困難に簡単

な解決を与えたり周囲の流れに身を任せたりせず、「知性」が麻痺していくのを回避するためにはどうしたらいいのかをずっと考え続けるための「長期戦」（時代の児の運命、前出）を覚悟するまでを描いているのだが、そういう庄司薫の戦略に対して目をつぶったまま話題が転換されている。『赤頭巾ちゃん気をつけて』の世界を、「学歴エリート」の「男の子」に向けて「凛々しい「治者」であろうではないか」とよびかける教養書として読むことには賛同するが、だからといって、この小説に描かれた「知性」のありようが、すでに解決済みなわけではないし、旧来的な教養書と同じスタイル、文法で記されているとも思えないのである。

たとえば、本名・福田章二の名で刊行された『喪失』の文庫（中公文庫）が昭和四十八年七月に新版となったとき、「新版あとがき」を書いた作者は、「……同年輩者との競争は、たとえその競争目標が、受験競争や成績競争のようなエゴイスティックな現実性を内包するものを離れた「純粹さ」、「誠実さ」といったものであつてさえも、競争関係に入るというそのこと自体で結局は他者を傷つけ、自らはその最も大切な人間らしい何かを喪失するようなメカニズムにまきこまれる、という結論を導いています。／つまり、ちょうど質量を持つ星々の間で光が或いは空間が歪むように、夢と可能性を持つ若さのまつただ中で

大切な何かが歪む。そしてしかもその歪み方は、星における質量と同じく、たとえばその若者の持つ若々しいデリカシーといった抽象的な「力の過剰」に比例するのではあるまいか。まさに「あはは、わかった。君は気に入った、お若いの」というメフィストフェレスの声が聞えてくる……」と記し、受験競争のような「エゴイスティックな現実性を内包するもの」だけでなく、「純粹さ」や「誠実さ」に由来するものであつても、ひとたびそれが「競争関係」に入ると、「他人を傷つけ」、自分も「大切な人間らしい何かを喪失するようなメカニズムにまきこまれる」と主張する。物事に歪みをもたらす「力の過剰」を制御し、できるだけそういった「競争関係」から逃れる努力を「持続」すること。そんな庄司薫の生き方は、少なくとも日本近代における教養論の系譜とはまったく異質である。「大切な何か」、「人間らしい何か」などという手垢のついた慣用語を用いるあたりはなんと説教臭いが、ここでは、優勝劣敗の競争原理はもちろんのこと、高度経済成長期において正統となりつつあった切磋琢磨の論理、すなわち、お互いを励ましあい、高めあうなかでそれぞれがすぐれた力を蓄積していくような成長原理（単なる競争原理とは違うところがミソである）さえ明快に否定されている。のちに浅田彰は、『逃走論 スキゾ・キツズの冒険』（昭和59年3月・筑摩書房）のなかで、「過去のすべてを積分<sup>インテグレート</sup>し統合<sup>システマチック</sup>化し

て背負いこみ」、「《追いつき追いこせ》競争の熱心なランナー」を育てるようなパラノ型の思考をやめることを提言し、「圧倒的な進歩と成長」を続ける社会においては、「競争過程」こそが「ある種の動的な安定」をもたらしたかもしれないが、「成長の終焉」が近づいてきた時代にあつては、むしろ、パラノ的な問いをあざやかにほぐらかし、総合から逃れ続けることが必要だと説いて一世を風靡したが、高度経済成長期のまっただなかを生きている作者・庄司薫は、それを先取りするように「逃走」をよびかけているのである。

また、「持続」に限つていうと、彼は「バクの飼主めざして」(前出)でこんなこともいつている。

……およそ「持続」という前提に立つ場合、どうやらぼくたちにとつてのすべての価値は、常に同じように迂回的で矛盾した努力をぼくたちに要請してくるようにも思われる。たとえば、一般にぼくたちの「他者」に対するやさしさは、実はその強さに比例する。強さに裏づけられていないやさしさは、気まぐれな虹のようなものであつて、美しさに異論はないにしても、はかなくて頼りにならないことが多いのだから。／同様にして、善意はおそらく確実に悪意に比例する。ぼくたちがどれだけの善意を持続して貫け

るか、ぼくたちがどれだけ悪意に通曉しこれを統御できるかにかかわつてくる。純粹さや誠実さにしても同じことなのは言うまでもない。自分自身の、そして他者の不純さ不誠実さに対抗できる戦闘能力があつて、初めてぼくたちはその純粹さ誠実さを落着いて持続的に育てることができにちがいないのだ。すなわち、不純さこそ純粹さを育てる栄養であり、誠実さは不誠実さを食べて育つ……。

「強さ」に裏つけられた「やさしさ」。「悪意」に比例した「善意」。「他者の不純さや不誠実さ」に対抗できる「戦闘能力」があつてはじめて育てることのできる「純粹さ誠実さ」。作者・庄司薫が価値あるものとして認めるのは、すべて「迂回的で矛盾した努力」によつて「持続」されたものばかりである。

恋人同士がお互いの存在を愛しむときの「やさしさ」や、親が子をまなざすときの「やさしさ」なら、恐らく、わざわざ庄司薫が筆舌を尽くさなくても多くの人々に了解されているだろう。高度経済成長期という時代は、小説はもとより歌謡曲から映画に至るまで「やさしさ」という言葉がメディアに氾濫した時代である。硬質で格調のある文体を誇った三島由紀夫でさえ、「だって僕たちは一年の婚約期間で、こういうことを勉強したんじゃないか。つまり二人だけの繭に入つてるときよりも、



他人のことを考えたり心配したりしているとき、一そう二人の間の愛情が深まるってことを。……それが他人をわれわれの愛情のために利用することになるだろうか？　そもそも他人はみんな僕たちのために在り、僕たちは結局他人のために在るんじゃないだろうか？　／「そう云えばそうね。皆が等分に幸福になる解決なんて、お伽噺にしかないんですけど。でも私、いつか兄も、幸福になってほしいと本気で思っているの」／「それは君のやさしさだよ。それで十分なんだ」（中略）「他人のことを考えることが、私たちのことを考えることでもあるのね」／「君は今、幸福だから、そんなに心がひろいのさ」（三島由紀夫『永すぎた春』、「婦人倶楽部」昭和31年1月〜12月、昭和31年12月・講談社、昭和35年12月・新潮文庫）という腑抜けた台詞をしたためるほど、通俗化された「やさしさ」（ここでいう「やさしさ」が「優しさ」と「易しさ」の二義的な意味を含んでいるというまでもない）がまかり通っていた。

また逆に、人が深く傷ついたり困難のなかで苦悩したりする姿を描くことについても、多くの読者が好意的に受け容れる風潮があった。「……君はいつも冷静に、正しく、自分の道を踏み外すことなく生きてきました。社研の読書会に出ながら、受験勉強も怠らず、浪人せず東大に入り、学生運動をしながら講義にもよく出席してストレートで大学院に進み、大学新聞に

学生運動批判を書く一方で修士論文も丹念に仕上げ、今は東大の助手で、学者としての将来、進歩的知識人、サルトルばりの新左翼としての将来は保証されている。ですが、その君にも一つできなかったこと、これからもできないかもしれないことがある。それに君は気づいていますか。それは傷つくこと、深く考えるいとますらなく、泥沼の中へ頭を突込んで、身も心も傷つき果てることです」（柴田翔「されど われらが日々——」「象」七号・昭和38年、のち「文学界」昭和39年4月に掲載、『されど われらが日々——』昭和39年8月・文藝春秋社新社）といった具合に、「進歩的知識人」であるためには、深く「傷つく」体験をもっていなければならないという観念が飽くことなく反復されていた。

だが、それらの諸作にみられる「やさしさ」や「やさしさ」を知るための条件は、どれもこれもイノセンスな主体というものを前提としている。イノセンスだから傷つきやすく、イノセンスだから他者にやさしくできる、という短絡的な回路で人間性が造型されている。庄司薫の場合は、むしろ、そうしたまっすぐに伸びていく「知性」、因習的なロジックのなかに見いだされる「知性」というものを疑い、悪意や不純さといった「迂回的で矛盾した」ものを經由してこそ獲得されるものととらえている。「青春と文学」という対談（『文学界』昭和45年8月）のなかで、そのことを佐伯彰一から問われた庄司薫は、「やさしさ

というのは、この現実の中で常に戦って獲得されるべきもので、従ってそれはもはやイノセンスじゃない。(中略) ふううは、外界と闘って、こちらが傷つくことによってそのイノセンスが浮かび上がるというのが、古典的少年小説だけれども、ぼくの場合はすでもともと主人公はイノセンスじゃないし、そのことを、たとえば自分におけるエゴイズムとかいやらしきとして知っているわけですね」と応じているが、彼の確信的な見方は、こうした発言にも深く刻印されている。喩えていえば、庄司薫が「知性」のなかに見いだした「やさしさ」は、ひとつの言葉、ひとつの行為として他者に対して与えられる贈り物ではなく、自分のなかに宿っている悪意や不純さといった負のエネルギーを飼い馴らす「強さ」に由来し、それをまとうことで身のまわりの他者をホツと安心させ、自分もそうなりたいという希望をいだかせるような感染ウイルスなのである。

人間の陶冶を目的とし、(ひとつの真実)(あるいは、それを探究することの悦び)を信じこませることで秩序をつくりだす大学は、教えをよりよく習得できる者だけを祝福する場所である。

その秩序を理解し、遵守できる一部の者だけが入ることを許され、それに従うことのできない者は疎外される。そして、数多くの疎外者がいるということこそが自分たちに与えられた祝福をさらに甘美なものにし、塀の内側にいる者たちの結束を強め

る。『赤頭巾ちゃん気をつけて』という小説が討とうとしたのは、そうした知的フィクションそのものであり、作者・庄司薫は、「ぼく」というひとりの受験生が大学というものに見切りをつけ、新しい「知性」のありかたを求めてそうした枠組みから颯爽と逃れていく姿を描くことで、ひとつの(神話)を解体しようとしているのである。さきに引用したエドワード・W・サイード『知識人とは何か』(前出)の翻訳を担当した大橋洋一は、「訳者あとがき」のなかで、

……著者が望ましい知識人と考えるのはどういう存在か。それは、専門的知識で重武装したエキスパートではなく、アマチュアである。ひとつの分野に呪縛されて、ひたすら何かに奉仕する専門家ではなく、各分野を自在に横断できるアマチュア。このアマチュア・モデルは著者によって亡命者、故郷喪失者というモデルと接続される。(中略) 著者によれば、知識人の責務とは、亡命者あるいは移民となり、つねにアウトサイダーとなつて、みずから生きる社会を冷静に見守れることにある。これは、批判精神の維持ということだ。これは、何かに全面的に奉仕せず、世俗的に個人として生きるということだ。これは、つねにマイノリティの側に立つということだ……

と述べているが、それは小説の主人公である「ぼく」およびそれを描いた作者・庄司薫の立場と限りなく重なり合っている。

高度経済成長期という時代のなかで誕生したこの小説は、たちまち同時代の若者たちの心をとらえ、一九七〇年代から現在に至るまでの青春文学（そういうジャンルがあればの話だが）の方向性を規定していくことになるわけだが、かりに『赤頭巾ちゃん気をつけて』以前／以後という線引きをするなら、その画期は、「知識人」こそ「アマチュア」でなければならぬというテーゼを見事に実践しているところにある。橋本治がそうであったように、庄司薫もまた、「知識人」であることは「マイノリティ」であることだというテーゼを選んでいるのである。

## おわりに

『赤頭巾ちゃん気をつけて』という小説は、昭和四十四年という混乱する時代にあつて「いやつたらしいお行儀のいい優等生」として生きる「ぼく」が、大学という場所を中心として権威化されてきた「知性」のいかがわしさを暴きだそうとする物語だった。そこには同時代を席捲していた政治的イデオロギーも出てこないし、社会の隅々に打ちこまれてくるあらゆる意味

での階級性も描かれない。「ぼく」の語りはどこまでも饒舌で、鋭利な頭脳をもった人間がわざと軽薄さを装うような道化ぶりを漂わせているが、いつていることはきわめて単純で、要するに、世の中にはびこっている知的フィクションに「気をつけて」ということらしい。その意味で、わたしはこの小説を通して作者・庄司薫が表現しようとしたこと、それ自体は理解できたり、語られている内容そのものについてもけつして錯誤があるとも思っていない。

だが、その一方で、『赤頭巾ちゃん気をつけて』がとても「いやつたらしい」小説であり、本稿に引用した高田里恵子が指摘していたような不愉快さを感じさせるのも事実である。その不愉快さの根源にあるもののひとつは、東大法学部で丸山眞男に学び、いわば学歴に関するトップ・エリートとしての資格もちながら、そうした学歴資本にほとんど依存せず、まるで余計な荷物を抱えているかのような素振りでのんしゃらんと暮らしている庄司薫という実在の人物に対する僻みであろう。具体的にいえば、「みんなを幸福にするにはどうしたらいいか」などといっているが、あなたがいう「みんな」って誰なんだ、あなたは本当に「みんな」が置かれている状況を理解しているのか……というかたちで噴出する嫌悪感である。別のいい方をすれば、「あなたがいう「みんな」のなかに私を含めないで欲しい」

とか、「あなたがいつていることは正しいのかもしれないけど、それをあなたにいわれたくない」という感覚に帰結するのである（庄司薫が訴えかけている相手は、「都会という舞台、アッパーミドルクラスの文化と生活様式、特権的上流学校」に属する「男の子」たちでしかないという高田の批判も、つきつめればここに帰結する）。

私たちの日常には不測の事故や人間関係をめぐるトラブルが蔓延している。いわれない悪意、暴力にさらされることもある。逆には、自分では気がつかないうちに誰かを傷つけていることもある。だが、「ぼく」が語る「幸せ」は、そうしたきわめて個別的な問題を隠蔽してしまう。「ぼく」は、「みんな」とよびかけることで個人と全体をいつきにつなぐのだが、自分だけは競争原理の外側にいるわけだから、競争原理の渦中でもない。一方的になまざされていくように感じられる。それは、ある意味で教祖の語りではない。

「知性」というものが「自由」のびやかに「広がっていくのは、「知性」に渴望する人々がたくさんいる状態のときであつて、もし「みんな」が幸福だと思えるような世の中が実現されたあかつきには、むしろ、そうした「自由」な社会をきつちりと束ねるシステムや、そこから逸脱することを許さないような警護的な役割が重要になる。つまり、「みんな」が自由であり

続けるためには、誰かがその「自由」を管理しなければならぬことになる。そうなつたら、「ぼく」のような人間はたちまちのうちにそこからいち抜けしようと思はずである。その意味で、「ぼく」がこの小説で実現しようとしている幸福というのは、〈クラインの管〉<sup>15</sup>のような、はじめと終わりが循環する構造になっているといえる（ちなみに、前出の浅田彰は、この「クラインの管」のような、はじまりが終わりであり終わりがはじまりであるような社会モデルをのぞましいと考えているようだ）。これと同じことが競争原理からの逸脱という問題にもいえることはいうまでもない。偉大な政治指導者や絶対的な力をもつ教祖が束ねるのであれば「みんな」が幸福になるという夢を信じることもできるかもしれないが、ここでは個人という単位でものを考えることはありえない。「自由」であることと、「みんな」が幸福であることと、「個人」が「個人」であり続けることを同時に叶えるのは原理的に不可能なのである。その意味で、『赤頭巾ちゃん気をつけて』という小説は、理屈をひとつひとつ積みあげているように見せながら、肝心なところが空所になっている。そして、そうした解決困難な空所が続けるがゆえに、現代にもつながらる問題を提起し続けている。

## 【注記】

1 高度経済成長期のまったなかである昭和四十年頃から、進学指導の目安として学校現場に導入された偏差値は、その後、大手予備校などが偏差値による大学ランキングを発表しはじめたことよって、受験生の学力を測る指標としてだけでなく、大学を数値によつて序列化する基準として利用されるようになり、偏差値の高い大学いい大学という図式をつくりだした。

2 ただし、小説内において「悪名高い」と自嘲されるほど名をはせていた日比谷高校も、昭和三十九年の百九十二名を頂点として徐々に東大合格者が減少し、昭和四十三年には百三十一名まで落ち込んでいる（『日比谷高校百年史 上巻』昭和54年3月・日比谷高校百年史刊行委員会）。また、主人公の次の学年（昭和45年度）からは東京都が学校群制度をスタートさせたため、優秀な生徒を一極集中させることができなくなり、日比谷高校の（神話）は次第に崩壊していく。昭和四十五年度は前年の浪人生たちが健闘して九十九名の合格者を出しているが、翌年からは五十七名、五十二名、二十九名、十四名と激減していく。

3 大学をバリエード封鎖した全共闘に対して、「警察力による封鎖解除も辞さぬ態度で入試を実施する」（加藤総長代行）と声明した大学側は、警察に対して機動隊の出勤を要請し、一月十八日早朝には八千五百名の機動隊員が構内に入って次々に全共闘メンバーを排除していった。追詰められた全共闘は安田講堂を占拠し、翌十九日にかけて火炎瓶、投石な

どで抵抗するが、ガス弾や放水で実力行使する機動隊を前になすすべもなく、二百五十六名の逮捕者を出して終結した。

4 四方田大彦は「赤門の前に白い割烹着を着て赤いカーネーションを胸に差した中年女性たちが数人並び、活動家の学生たちにキャラメルを配り、声を囁らして機動隊との対決をやめるように呼びかけていた」（『ハイスクール1968』前出）と記しており、三田誠広とは違った証言をしている。かりに四方田の記憶が正しかったとすると、キャラメルを配ったのはひとつの組織的活動（あるいはキャンペーン）であり、嘲笑的に伝えた報道そのものが事実を歪曲していたことになる。

5 「喪失」（前出）が中央公論新人賞を受賞した直後に「新人福田章二を認めない」（『新潮』昭和34年1月）を書き、その後の庄司薫、福田章二の評価に決定的な方向性を与えた江藤淳は、その論考の最後を、「石原慎太郎氏や大江健三郎氏ら」によって「解放された新しい文学的エネルギーの洪水」によつて、「喪失」以下の片々たる模造物はまっさきに流れ去るべき運命にある」と締めくくっている。そうした評価は別として、ここで江藤淳が「模造物」という言葉を使っていることは注目されている。大塚英志は「庄司薫はデレク・ハートフィールドなのか」（『サブカルチャー文学論』平成16年2月・朝日新聞社）のなかで、小説の主人公である「薫くん」（昭和四十四年当時、高校三年生）と同世代の書き手である村上春樹や高橋源一郎や三田誠広らはなぜ「失語症のように苦しみ、過度に仮構化された「私」を捏造することでようやく語り始めることので

きる自分を示さずにおれない」のかと問いかけ、「庄司薫という一世代上の小説家の手によって彼らが語り出す以前にあらかじめその「私」のあり方が示されてしまった」からだと指摘しているが、この説に従えば、江藤淳が挑発をこめて使った「模造物」という認識は、庄司薫≡福田章二を起点として一九七〇年代末から一九九〇年代にまで跨る文学的課題のひとつだったことになる。

なお、大塚英志は同論のなかで、「つていうか」、「感じてしまう」、「ところがぼくとしたら」といった決まり文句を挿入してわざと冗長的な語り口をとる『赤頭巾ちゃん気をつけて』の文体に注目し、「このような感染力の強い文体があらかじめ存在するということは、意識的に何かを語ろうと思ったとき、ひどくやつかいである」と述べている。また、庄司薫の「薫くん」四部作<sup>9</sup>は、自分を絶対に認めようとしなかつた江藤淳が書いた『成熟と喪失——母の崩壊』（前出）への「回答」あるいは「批判」として書かれているのではないか、という「仮説」も提示している。どちらも興味深い指摘である。

6 永井龍男は、「赤頭巾ちゃん気をつけて」が芥川賞を受賞したときの選評で、「読み進むうち、この小説は二人以上の筆者による合作ではないかと推理したが、結末の「あとがき」に到ると、そういう読者を予測したかの感想も添えてあった。「薫」というあやつり人形は巧みに踊るが、人形使いの姿が露出する個所もあるのである」（引用は『芥川賞全集 第八巻』昭和57年9月・文藝春秋）と述べている。

7 本文中では「亡命型」というか趣味型というかそんなのがある」とい

う曖昧な表現をしているが、本稿は前章でサイードの「亡命者」という概念を使っているので、誤解を避けるためにここでは「亡命型」という言葉をつかわず「趣味型」と表記した。サイドがいう「亡命者」と本文に描かれる「亡命型」とはまったく次元の異なるものだ<sup>10</sup>と理解している。

8 庄司薫は「十年ののち」（『狼なんかこわくない』前出）に、「一九六〇年前後に東大法学部で丸山真男の教えを受けた学生たちがつくった小さな会で、卒業後もずっと定期的に丸山先生を囲んでしゃべる会を開くと同時に、「60」という小さなタイプ印刷の機関誌を出してきた」と記している。

9 イバン・イリイチは、「知性」には「ページの隠喩にはぐくまれてひとが成長するようにしむける」ための制度的枠組みが必要だとして、（1）昨日書かれ、いま再読できる一行として、みずからの思考を思い出すことができる存在として、みずからを理解していること、（2）本を調べるようにみずからの意識を調べることができる存在として、みずからを理解していること、（3）結婚や市民権や職業のような安定した関係を、契約による合意の結果として理解していること（4）確定され、テストされ、反証されうる知識が存在することへの信念個人主義的な自己の独創性と著作権への敬意の必要性を説いた（テキストと大学【大学という独特の制度、その理念と歴史】、「訳・解題」桜井直文、『環』平成15年夏・増大号、藤原書店）が、「ぼく」が信じるものが、それと対極的な、けっ

して書かれたもののなかに見いだすことのできないなかであることは本文でも述べた。

10 この小説よりも少し早い時期、高度経済成長にもなつて大衆化していく大学の未来像を「教育・学問・研究という知識の生産と流通のプロセス」から考察した東京大学教授・京極純一は、大学には「知識の伝達という意味の教育と異つた教育、すなわち、人間の潜在的な能力の開発とそれによる文化適応の完成という人間的な意味の教育」（思想）昭和40年4月）が必要だと論じていたが、ある意味、それは「ぼく」が求める「知性」と呼ぶする内側からの声だつたのかもしれない。

11 『赤頭巾ちゃん気をつけて』以降、庄司薫は『さよなら怪傑黒頭巾』（昭和44年11月）、『白鳥の歌なんか聞えない』（昭和46年2月）、『ぼくの大好きな青髭』（昭和52年7月）―いずれも中央公論社―を発表し、赤黒白青四部作を完結させたあと、再び小説の筆を絶つた。

12 栗原彬は『やさしさのゆくえ―現代青年論』（昭和56年6月・筑摩書房）で一九六〇年代の終わりから若者の「やさしさ」に対する認識が変容していく過程を分析し、『赤頭巾ちゃん気をつけて』について、「この小説は、作者自身が自註しているように、やさしさと自己抑制を主題とし方法としている。薫は（やさしい青年）の原型といえる。小説の時点が一九六九年であることはこのほか意味が深い。高度経済成長の暮方に「愛と平和」の歌が高らかにうたわれ、青年の力が歴史と結びつくような幻想があつた。だが、「ヤング」が消費市場の主役となり、若者が持ち上げ

られる風潮の中に、作者は青年に仕掛けられた罠を見たといえる。過剰な情熱への自己抑制とやさしさがつき出されたとき、それは文字通り「赤頭巾ちゃん気をつけて」という青年への呼びかけであり、狼に対抗する生き方の方法的提示であつた」と述べている。また、その八年後の一九七七に芥川賞を受賞した三田誠広の『僕って何』（文藝）昭和52年5月、のち昭和52年7月・河出書房新社）との違いについて、『赤頭巾ちゃん』の方法がやさしさと自己抑制だつたとすれば、『僕って何』の方法はやさしさと受身だといえる」と指摘し、この間に「既存の社会装置」はいっそう強化・拡大され、アイデンティティも拡散したとしている。

13 円錐のように土台から上方に向けて積みあげられたものが、頂点まであがつたらいつのまにか土台の部分に戻つてしまふような、外が内でありはじまりが終わりであるような世界。図参照。



【付記】

本稿は、平成18年度科学研究費「日本と中国の〈高度経済成長期におけるメディアと表現〉に関する多角的研究」の成果の一部である。

（立教大学文学部教授）